

演劇ワークショップ 「身体と思想をつなぐ言葉と俳優術」

横山綾香

本ワークショップは、ロシア国立マールイ劇場演出家で、モスクワ大学心理学部研究員のヴィクトル・ニジェリスコイ氏の本学来訪に合わせて、2021年12月20日に総合文化研究所(422教室)で行われた。参加者を20名以下に限定したが、久しぶりの対面開催による総合文化研究所主催イベントとなった。

ニジェリスコイ氏は、マールイ劇場附属演劇学校卒業後、演劇活動のみならず、モスクワ大学で身体表現の研究を行なっている。2006年に来日し、劇団前進座の養成所で日本の舞台動作を学び、その後立教大学で5年間教鞭を執った。今回は自身が演出する舞台の日本上演のために来日していた。

ワークショップでは、最初にロシアの台詞劇の歴史について解説が行われた。19世紀末、劇中で激しい諍いや恋愛が起きない、日常生活における人間心理の移ろいに着目した戯曲が出現した。いかにも芝居がかった大仰な演技を良しとする当時のスタイルは日常生活を描いた戯曲に不向きであった。それに対して意識的であったスタニスラフスキーとネミロビッチ＝ダンチェンコが演劇改革を行い、現在でもロシアを代表する劇場であるモスクワ芸術座を創設した。その後メイエルホリドなど非日常的な身体表現を志向する潮流も生まれたが、スタニスラフスキーらが考案した、台本の緻密な分析によって役の感情が自然に湧き出させることを目指す演技スタイルはロシアの台詞劇の「クラシック」として確固たる地位にある。

次に、ロシア演劇の金字塔であるA.チェーホフの『かもめ』の謎についてニジェリスコイ氏自身の解釈を参加者に説明した。『かもめ』は芸術観をめぐる世代間のすれ違いを描き、主人公の自殺で幕切れとなることから、感傷的な物語として上演されることが多い。しかし、チェーホフはこの戯曲を喜劇と位置付けている。これが『かもめ』を上演する際の難点である。

登場人物の精神の変化に焦点を置くと喜劇として見ることができる、と講師は言う。アリストテレスは悲劇は次第に状況が悪化し、喜劇は状況が好転する物語であると定義した。『かもめ』では登場人物の間で起こる出来事は深刻になっていく。一方で、登場人物(特に主人公トープレフとニーナ)の精神状態は、親世代に対する葛藤や将来への不安に苛まれた不安定な状態から最終的には解放される。

1時間程度のレクチャーの後、ロシアの演劇学校の1年生が実際に行う基礎的な訓練を体験した。3種類の訓練に挑戦したが、そのうちの1つは椅子から立ち上がるという自然な動作のみで相手を喜ばせるという課題であった。いざ相手に喜ばせようと立ち上がると、

日常生活ではしないような動きになってしまい、スタニスラフスキーが目指した「自然な演技」がいかに難しいのか体感した。

最後に、モスクワ国立大学心理学部のアレクサンドル・ラエフスキー准教授も加わり、プーシキンの韻文小説『オネーギン』の舞踏会からレンスキーとオネーギンの決闘に至る部分のほか、マヤコフスキー、レールモントフ、パステルナークの詩の朗読が披露された。単語1つ1つが完璧には分からなくとも、詩に描かれた内容が聞き手に伝わるような、生き生きとして臨場感に溢れる朗読であった。

TUFS 学内演劇ワークショップ

身体と思想をつなぐ言葉と俳優術

日時：2021年12月20日（月）16:00～17:30

場所：東京外国語大学 総合文化研究所 422 教室

講師：ヴィクトル・ニジェリスコイ

（ロシア国立マールイ劇場演出家・モスクワ大学研究員・教育学博士）

TUFS 学内演劇ワークショップ

身体と思想をつなぐ言葉と俳優術



ヴィクトル・ニジェリスコイ

ロシア国立マールイ劇場演出家・
モスクワ大学研究員・教育学博士

使用言語
主に日本語
詩はロシア語

チェーホフの『かもめ』
を演出する際に直面する
課題についてお話し
します。ロシアの演劇
大学で行われている俳優
術の基本を実際に
試し、ロシアの読み稽
古の雰囲気を感じて
ください。

後半は詩の朗読に
挑戦しましょう。ロシ
アの古典や「銀の時
代」の詩人を取りあ
げます。ぜひロシア
語の魔法を感じて
ください！

2021年12月20日(月)16:00-17:30

総合文化研究所 422 教室

先着20名! 申込は沼野恭子 (nukyoko@tufs.ac.jp) まで
主催: 総合文化研究所「多文化共生としての舞台芸術」プロジェクト